安積疏水と小林久敬

小林久敬は文政四年（一八二一年）須賀川に生まれました。このころの須賀川は、奥州街道の宿場として発展していました。久敬の家は、この街道にそって運送の仕事をしていました。町でも久敬の家は金持ちで、店には五、六人の奉公人が働いていました。そのなかに、久敬の友だちである喜助がいました。

喜助は、久敬の家の小作人の子どもで、年貢米のかわりに質物奉公人として働きにきていました。久敬は、喜助のお父さんがなんども頭をさげて、お金をかりていく姿を不思議に思ってみていました。このころの須賀川は、商業でにぎわっていましたが、農民は、うち続く日照りで、田んぼのいねが実らず食べるものがなく、苦しいくらしをしていました。このようなくらしをみてきた久敬は、貧しい農民を救うには、田んぼにたくさんの水がくるようにすることだと、考えるよ